

吉蔵撰『金剛經義疏』 における問題

栗谷良道

吉蔵撰『金剛經義疏』についてはあまり研究されていないのであるが、佐藤哲英博士の著書『天台大師の研究』では、吉蔵疏と天台疏との比較がなされており、吉蔵は天台説『金剛般若經疏』（以下天台疏）を参照していると推論されている（四〇八～四二二頁）。すなわち、吉蔵撰『金剛經義疏』巻第一の

(1) 有人言。開為三段。一者序說。二者正說。三者流通說。大聖說法必有由漸。故有序說。序說既竟正宗宜開故有正說。非唯近益當時。亦乃遠被來葉。故有流通說。今謂三說開經於理無妨。
(大正三三・九一下)

(2) 自北土相承流支三藏具開經作十二分積。一者序分。二者護念付屬分。三者住分。四者修行分。五者法身非有為分。六者信者分。七者格量分。八者顯性分。九者利益分。十者斷疑分。十一者不住道分。十二者流通分。……中略……然此之解釈盛行北地。世代相承多歷年序。而稟學之徒莫不承信。余鑽仰累年載。意謂不然。今請問之。此十二分為出般若經文。為是婆藪論積。今所觀經論悉無斯意。蓋是人情自穿鑿耳。（大正三三・九〇下～九一上）

と説かれている箇所について、前者は天台疏の「就此一經開為三段

序正流通。序為緣起。說教之前必有由漸。分衛放光雨華獻蓋等也。由漸既起正教宜陳。緣教相感其猶影響。故有正說。又非止近被一時。乃欲遠傳來除。故有流通」（大正三三・七六七）という箇所を踏襲しているときれ、後者は天台疏の「後魏末菩提流支訳論本八十四偈。彌勒作偈天親長行。積總三卷分文十二分。一序分二護念分三住分四修行分五法身非身分六信者分七校量顯勝分八顯性分九利益分十斷疑分十一不住道分十二流通分。講說時別一途開章耳。」（大正三三・七六上）という箇所を批判したところであると指摘されている。果してそうであろうか。

まず最初に吉蔵の説く三段分科についてであるが、指摘されている通り、天台疏とは序說正說流通說についての解釈までも一致している。しかし、三段分科については吉蔵の他の經疏中においても見いだすことができ、中でも『仁王經疏』巻第一では、

然諸仏說經本無章段。始自道安法師分經以為三段。第一序說第二正說第三流通說。序說者由序義說經之由序也。正說者不偏義一教之宗旨也。流通者流者宣布義通者不擁義。欲使法音遠布無壅也。所以有三說者欲明勝人致教必有因緣。先明序說開漸既彰。正經宜

弁故復正說。聖人大悲無限衆生受化無窮。非止復益當時乃欲遠伝後世故有第三流通也。（大正三三・三二五下）

と説かれており、一見すれば明らかかなように、『仁王經疏』に見られる三段分科の解釈は『金剛經義疏』の解釈と一致するものである。そして、疏中、問題となっている三段分科の典拠を道安に求めていることが理解される。なお、『出三藏記集』巻第十三には「安法師法集旧制三科」（大正五五・九二中）とあり、道安に三段分科のあった事実が伝えられており、三段分科の典拠を道安に求めている

る吉蔵説の信憑性を指摘することができる。また『金剛経義疏』巻第一には「道安法師所講者。……」（大正三三・八六中）とあり、疏中、道安が引用されている。すなわち、『金剛経義疏』撰述の折、吉蔵が道安を参照していることは明白であり、三段分科の有人説は天台疏を指すのではなく、道安の説と解釈することができる。

次に十二分科についてであるが、前述資料の如く、吉蔵は十二分科の説を菩提流支の説であると述べ、天親の説であることを否定している。この点に着眼した佐藤博士は天台疏に対する吉蔵の批判と指摘されている。

ところで、十二分科については、金剛経の注釈書『金剛仙論』巻第一に「如是已下訖於終末。正弁経体。序正流通義如常弁。於中随義曲分。凡有十二段。始從序分終訖流通。即其事也。」（大正二五・八〇〇上）とあり、十二分科の典拠は『金剛仙論』であることが予想される。ここで、問題は吉蔵が『金剛仙論』を見ているかどうかであるが、『金剛経義疏』巻第一には

復次有婆敷盤豆弟子金剛仙論師。菩提流支之所伝。述亦說般若緣起。所以說般若者。為断衆生十種障故。言十種障者。一無物相障。二有物相障。三非有似有相障。四謗相障。五一有相障。六異有相障。七実有相障。八異異相障。九如名義相障。十如義名相障。（大正三三・八五上）

とあり、婆敷盤豆・金剛仙論師を次第した説を菩提流支が相承していることと述べ、菩提流支所伝の十種障を引用している。この十種障は『金剛仙論』巻第一の「十障者。一者無物相障。……二者有物相障。……三者非有似有相障。……四者謗相障。……五一有相障。……六者異有相障。……七者実有相障。……八者異異相障。……九如名

吉蔵撰『金剛経義疏』における問題（粟谷）

義相障。……十者如義名相障。」（大正二五・七九八上）という箇所には、

論主天親既從無障礙比丘辺學得。復尋此經論之意。更作偈論。広興疑問。以釈此經。凡有八十偈。及作長行論積。復以此論。転教金剛仙論師等。此金剛仙。転教無尽意。無尽意復転教聖濟。聖濟転教菩提留支。迭相伝授。以至於今。（大正二五・八七四下）

とあり、天親の論積を次第相伝して終には菩提留支に伝授されたことが示されている。この記述は前述した吉蔵の説と全く一致しており、吉蔵が『金剛仙論』を参照していることは明らかである。

そこで、問題の十二分科についてであるが、『金剛仙論』巻第一には、

及次第者。明此法門十二段分數次第。從此一段。至此一段。生起法用。或時次第。或時超越。所以難知。（大正二五・七九九中）

と説かれている。この箇所は天親造『金剛般若経論』巻上の「法門句義及次第」（大正二五・七八一中）という句についての解釈であり、すでに天親が十二段に分科しているかの如くに記されている。

實際、天親の『金剛般若経論』には十二段の分科はなく、天親・金剛仙論師よりの相伝と述べてはいるが、菩提流支が人情により穿鑿した説であり、吉蔵はこの点について厳しく批判しているのである。

以上、まとめて述べると、まず三段分科についての有人説とは道安を指しており、天台疏を指しているのではない。そして十二分科の典拠についての吉蔵の見解は北土相承説を主張する菩提流支に対しての批判であり、天台疏を批判したものではない。これらの事実より、最早、吉蔵が天台説『金剛般若経論』を参照したとする根拠はなく、その推論は成立しないことになる。（駒沢大学大学院）